

希望

チューリツヒ日本人学校便り

平成 29 年 12 月 12 日 発行

第 29 号

編集発行 鈴木史良

人権の大切さを学ぶ

—— 子どもたち一人ひとりの“人権宣言”の発表 ——

12月8日（金）の6校時に、全校児童生徒による人権集会をもちました。本校の人権教育目標は、“ことばや習慣の違いを尊重し、自尊感情を育てながら自他のよさを認め、人を思いやるあたたかい人間関係を築こうとする気持ちを培う”です。この目標に一步でも近づこうと、人権週間のなかで各学年とも成長段階に合わせた人権学習に取り組んできました。それらの学習の成果として、一人ひとりが全校児童生徒、教師が見守るなか、自分の作成した人権標語を発表しました。名前を呼ばれると、大きな返事を返し、みんなの前に立って大きな声で自作の標語を発表できました。その態度も折り目正しく、たいへん立派でした。子どもたち自身の“人権宣言”ともいえる標語を、ここに紹介いたします。

<小学部1年生>

- ・ニッコリと あいさつしようよ みんなでね
(にっこりとあいさつすると、きもちがよいから)
- ・たのしくね みんなでいこう あしたにさ
(ひとりでたのしむより、みんなでたのしんだほうがよりのしいから)
- ・あそぼうよ うれしいきもち さくらいろ
(あそぼうとさそわれると、はるにさくさくらのようにあたたかいきもちになるから)
- ・やさしいね ハートがとどく ありがとう
(ありがとうといわれると、うれしいきもちがとどくから)
- ・ありがとう うれしいことば つかおうね
(みんながよいことばをつかうようになったらうれしいから)

<小学部2年生>

- ・だいじょうぶ? 人をうれしくする ことば
(こまったりなやんだりしている人にかけると、うれしくなることばだから)

<小学部3年生>

- ・勉強も遊びもね 楽しくなかよく みんなでさ
(見ためはこわいけど心がやさしいおにのこを勉強し、いろいろな人となかよくしたいと思ったから)

<小学部5年生>

- ・アップしないで 自分に言われて いやなこと
(自分に言われたくないことをインターネットにアップすることはいけないことと改めて思ったから)
- ・わからない どんな気持ちで 書いてるの
(メールは自分の気持ちが相手に伝わるように書きたいと思ったから)
- ・読み返そう 相手の気持ちに なってみて
(相手がいざつかないように、相手の気持ちになってメールや手紙を書きたいと思ったから)
- ・欠点は 名前といっしょに 伝えよう
(自分のコメントにはしっかり自分の名前を書いて相手に伝えたいと思ったから)



<中学部2年生>

- ・非難せず 他人のことを 思いやる
(卓球クラブでの体験で思いやりに気づいたから)
- ・いじめたら いつかきっと はね返る
(中1の頃、実際にあったことを見た経験から)

<中学部3年生>

- ・使い方 誤ると重傷 言葉は凶器
(人と話すときの言葉に気をつけたいと思ったから)
- ・他人より 自分のことを 見直そう
(他人を悪く思うより、自分を見つめて改善したいから)



人権集会での個人発表の様子

ぞうさんの歌のひみつ (人権集会/校長の話の解説)

♪「ぞうさん ぞうさん おはながながいのね」♪

♪「そうよ かあさんも ながいのよ」♪

日本じゅう、多くの人々に愛され、誰もが口ずさめるこの歌は、1953年にNHKラジオの「うたのおねえさん」という番組で初演されました。私も長い間、この歌は、仲のよいぞうの親子を歌ったかわいらしい歌としか受け止めていませんでした。ところが、ある中学校国語教科書に詩人阪田寛夫さんの文章がとりあげられました。阪田さんは♪さっちゃんはね さちこっていうんだ、ほんとはね♪ という童謡の作詞者でもあります。その阪田さんが、「ぞうさん」の作詞者である詩人まどみちおさんに、この歌の意味について尋ねました。すると、まどさんから、次のような衝撃的な言葉が返ってきたそうです。

「ぞうの子は、鼻が長いと悪口を言われた時に、しょげたり腹を立てたりする代わりに、いちばん好きな母さんも長いのよ、と誇りをもって答えた。それはぞうがぞうとして生かされていることがすばらしいと思っているからです。だからこの歌は、ぞうに生まれてうれしいぞうの歌、と思われたがっているでしょう。」

「ぞうさん おはながながいのね」はぞうに向かって言われた言葉。(ぞうの鼻はずいぶん長いな、みんなと違って、少し……へんだな。)と読むこともできます。そうになると子ぞうにはつらい言葉になるでしょう。ところが、その言葉の後の子ぞうの返答がすばらしい。まず「そうよ」と堂々と肯定し、そればかりか大好きな母さんも長いのよ、とたたみかけています。(みんなと違っていい。ぼくらしいから、それでいい。)と誇りをもって答えたのです。まどさんは、戦時中、技師として日本占領下の台湾で働いた経験がありました。民族を越えて仲良くしようとしたまどさんの思いが、戦後この歌になって結実したのです。そういうことを伝える阪田寛夫さんの文章を生徒たちと学びながら、私はこの歌への思いを深くしました。

